

## パネルディスカッション

コーディネイター	宇都宮大学教育学部	陣内雄次	助教授
パネラー	宇都宮大学農学部	酒井豊三郎	教授
	宇都宮大学国際学部	中村祐司	教授
	元塩谷広域行政組合		
	ごみ処理検討委員会委員	増淵利江	氏
	(有)たておか商店代表取締役	立岡芳司	氏

黒須課長      コーディネイター・パネラー紹介  
陣内助教授（コーディネイター）

今日はですね、塩谷広域圏でこういうシンポジウムをやっておりまして、5月23日から毎週日曜日やっております。今日は最後の会場という事で、塩谷町で開かせていただいているわけですが、ここの会場のすぐ近くには熊の木学校があります。閉校になった小学校で宿泊などをして色々環境の事を学べるようになっていきますし、塩谷には名水百選にもなった所があり環境的には塩谷広域という事を考えますと重要なポイントにあるのが塩谷町でないかと思うわけでありまして。

先程、酒井先生から「ごみはなくなる」という非常に分かりやすく、「ごみ」というものを私たちが考える視点としてお話をいただきました。私が最近感じたことが、先程酒井先生の話の「ごみが邪魔なのか、邪魔でなければごみにならない」という話を聞いて感じた事をお話ししたいのですが。

私は教育学部にいます。教育学部には将来先生になりたいという子が来るわけですね。宇都宮大学でもここ数年ごみの資源化という事で一生懸命やっているわけです。

私の研究室のすぐ前の廊下にですね、つい最近なんですけどダンボールの箱が潰されて置かれていました。月1回資源ごみの収集日が決まっているんです。宇都宮大学では、研究室のすぐ前が決められた場所になっているんですが、そこに資源ごみが出されてました。何でそういう事をやるのか、よく考えているんですけど、要は酒井先生がおっしゃった、学生はですね自分達の使っている研究室にある邪魔な物は、廊下に出しちゃうんですよ。手を離れると自分達の物ではないです。そこで平気になっちゃうんですよ。「誰かが片付けてくれるだろう」って。

なんで学生達がそういう事が平気かというと、酒井先生のお話を聞きながら色々考えたんですが、要は、学生達は4年とかで大学からいなくなっちゃうんですよ。大学は、職員と教員を合わせて500人位、学生は5,000人位います。5,000人位いる学生達は4年とか6年するといなくなるんですね。「いずれ自分はいなくなるから関係ないや」という感覚が学生にはあります。そうすると酒井先生が最後にまとめてくれた「コミュニティー作り」の物凄く難しい所が大学という所なのかもしれない。けどみなさんは塩谷町という現実の世界に永く生活していかれるでしょうし、基本的にコミュニティーという点ではどうなのかという事が今日のテーマであります。結局その

ことがごみ問題を考えるという事なのかと考えます。

前置きが長くなりましたが、これから4名のパネラーの方々にお話いただきますが、酒井先生の基調講演と関連づけなくても良いですから、それぞれの立場でどういうふうにごみ問題に取り組んでいるのか、どういう問題が塩谷町にあるのかという事を含めてお話いただければと思っています。

それでは住民代表という事で増淵さんからお願いいたします。

増淵氏

私は元ごみ処理検討委員会のプラスチック部会というところに所属しておりました。そこでごみの減量化資源化について学んだこと、感じた事を私なりにお話したいと思います。

私達の生活が日頃便利になり、一方でペットボトルを始めとして大量のプラスチックごみが増えてきていると思います。

各家庭の減量化対策は、ますます重要なものになってくるのではないかと感じております。例えばですね、先程先生がおっしゃったごみになる物は買わないとか、本当に必要な物かどうか考える、過剰包装は断るとか、買い物バックを持参する、使える物は出来るだけ使うようにする、それと資源としてリサイクルするためにキッチンと保管する事が大切だという事を再認識しました。私自身生ごみ・紙・プラスチック・ビニールなどの可燃ごみは指定袋に入れて、ビン・缶・ペットボトルは分別して出しております。前にテレビで、更に細かく分別している自治体があるという事を見ました。塩谷町でも今後の課題ではないかなあと考えております。

委員会の中で事業系のごみを調査した事があるんですけど、その時には殆んどが分別されていないまま出されておりました。私達家庭ではそれなりに分別してごみステーションに出していると思うんで、きちんと分別していただくべきだと思います。事業者の皆様にも協力していただければ良いなあという事を強く感じました。

それと私はマイバックを使用した事はありません。使用しなければならぬと思うんですけど忘れてしまい、買い物に行くと気づくほうなので徐々に習慣づけていきたいなあと思っています。

私達の周りにはいつも沢山の情報が流れており、物が溢れている時代だと思うんですね。忙しい毎日を送る中でごみ問題に無関心な人がいます。年に1度道路のごみ拾いをして分かるように、平気でごみを捨てていく人がいてマナーの悪さに驚いております。それと焼却場の実態とか環境の大切さというのを分かっている人、分かろうとしている人がどの位いるだろうかといつも思っています。

私自身この勉強会に入る前にそんなに関心はなかったのですが、1人でも多くの方が関心を持ってくれば良いなあと思っています。日頃感じているんですけど、ごみ出して意外と大変なんですね。ビンを出すにもキャップを取って中の内ブタみたいのをプライヤーで取らないいけないとか、色々大変だと思うんです。ごみ収集にあまり条件を付けられますと、ごみステーションは綺麗になるんですけど、近くの山林とかがごみの山になるという現実があると思うんです。ごみは何でも収集してもらえればと思いますが。

何でも収集しているという自治体があり、最初は物凄いごみの量だったそうですが、後になってくるとごみの量が少しずつ減ってくるということをテレビで見たんですけど。

誰もが関わっているごみ問題をどうしたら関心を持ってもらえるのか、また人ごとでないという事を分かってもらえるのかという事を強く感じます。

私達消費者が出来ることは、環境が大切という事は誰でも感じていると思うんですね。環境に配慮した商品を買う目を持って、買い物をするという事がお店の品揃えを変えたりするという事につながっているんじゃないのかな、という事を強く感じております。この問題は、私達住民と事業者、行政とみんなして考えていかなければならない問題だと強く感じました。

陣内助教授(コーディネイター)

ありがとうございました。ここで打合せにはなかったんですけど増淵さんに質問したいんですが、マイバックをどうして使わないんでしょうね。

増淵氏

ごみ処理検討委員会でも、スーパーの袋を小さく折って、「レジ袋何度も使って・・・」何でしたっけそういう標語があったんですけど、バックの中に入れていくという意識がないんだろうと思うんです。買い物に行って買い物をしている方がバックを持っているのを見ると、そうだ！と気が付きます。そのところの意識がまだ自分には薄いので、実践となるとなかなかできないですね。

陣内助教授(コーディネイター)

今回のシンポジウムのどこかの会場で、今日見えているかどうか分かりませんが、「ごみ出し月1女」といわれている方で、家庭ごみの減量化をしている方がいるんですが、その方はマイバックを当然のように使用しているそうです。その方は神奈川県かどこかから引っ越してこられて、神奈川県ではマイバックを使うのが当たり前で、こちらに来てマイバックを使っていないことがカルチャーショックだったそうです。皆でやれば恐くないという事で、皆がやっていればうちでもやろうという気になってきます。

立岡氏

私はこのたび、事業者代表として今回のシンポジウムに参加した立岡です。最初の基調講演を聞きまして、私あらためて考え直された事を2、3お伝えしたいと思います。

「自分に必要でない物はごみであって、別な方向から見ると資源である、すべてが資源である」と基調講演されましたけど、このことが今改めて考えさせられます。

次に私事で困っている事なんですけど、店の前の自動販売機の隣にカゴがあって、その中にコンビニのお弁当のパックだけならいいんですけど、残飯やドリンクの空ビン、空缶、それから週刊誌などが袋に入ってギッチリ縛って捨ててあるんです。毎朝それをほどいて分別して処理しているんですけど、人のいない夜中に自動販売機を利用した方が置いていってしまうんだろうと思いますが、もう少し良識ある利用をしてもらえないかと思うのです。

次にリサイクルの事なんですけど、私、酒屋なもんですから、お酒のビン

やビールピンは殆んど100%以上回収されているんです。焼酎とかドリンク類のペットボトルに皆さん御承知のとおり横にリサイクルのマークが付いております。でも、そのリサイクルどうやったら良いのかよく分かっていないのではと思います。自分も「リサイクルってどうやったらいいのか」と訊かれると困ってしまうんです。

その辺の問題をもう一回考え直す必要があるような気がします。特に今は原因者の責任という事なので、メーカーがもう少しリサイクル表示するだけでなく、何か良い方法手段を考えただければと思います。

次に毎日感じている事なんですけど、新聞の折込、それから頼みもしないのに送られてくる重いダイレクトメールなど、中を見ないで捨ててしまうんじゃないかなと思うんですよね。そんな事も皆で考えていない物を送ってこない、いらぬ物を買わない方法を考えたらいいんじゃないかなと思うんです。

私は以前松島の処理場を見た事があるんですが、職員の方にごみ袋を引き出してごみの中を広げて見せてもらったことがあるんです。その中身なんですけど、表現が難しいんですが、つまらないごみなんです。こんな再資源出来るような物までごみとして出してなんだろうと思いました。例えば、紙などが沢山あるんですね。ですから町民が、松島の方を通るような婦人会の旅行とかバスなどで出かける時に、空ビンがガラガラ流れる現況を見るだけでもごみは減量されてしまうんじゃないかなと思っております。

また私の事になってしまうんですけど、お店の前にある自動販売機の販売数量の倍くらい空缶が集まってしまうのです。そこに集まってくるアルミ缶をプレスしてお金にするといっちはおかしいんですが、そんな方法を考えています。関係機関とか皆様のご指導をいただいて多少のお金がかかっても近いうちやってみたいと思います。

陣内助教授(コーディネイター)

松島の処理場なんですけど、皆様の出されているごみは松島の処理場で処理されているのですが、皆様の中で処理場を見にいかれた方いらっしゃいますか？何人いらっしゃいますか？

この一連のシンポジウムの中で何度も出てきた事なんですけど、これも酒井先生の講演の中に出てきた「邪魔だから出す」というところに通じるんですけど、ごみ問題を私達が意識化出来ない、自分達の問題として感じられない、というのが大きいのかなという事が議論の中に出てきたんですね。私達あまり意識しないんですが、ごみを処理する為に皆さんお金を出していらっしゃる。そのごみを塩谷広域行政組合で運営している中間処理施設で処理しているという事なんです。そういう仕組みが出来上がっているものから、出せば処理してくれる、自分達の日常的な問題として感じる事が出来ない、という仕組みになってしまっているんだと思います。それをですね増淵さん立岡さんからお話しいただいたんですが、どういうふうにすれば人ごとではないと感じていただけるのか。人ごとでないと感じていれば、立岡さんのお店の前にある自動販売機の横にごみを置いていくという事がなくなるんじゃないでしょうか。そういう非常識的な事はしなくなるという事になると思

います。  
中村教授

私も一昨年から本格的にごみ問題について勉強を始めています。今回シンポジウムとか、昨年の報告書の為に全国の先進地といわれる所を少し回る機会がありました。例えば、小田原市ではプラスチック類を含めた分別回収を行っていたりですね、沼津方式といったような先進的な手法を取り入れた町を見たりですね。また、北九州など色々見させていただきました。

そこで強調したいキーワードというのが「子供達」ということです。北九州市で環境ミュージアムという建物がございまして、そこでは特に子供達に対して、ごみ問題を楽しみながら興味をもって勉強してもらおう事をモットーにしているんですね。

「宇宙の星から来たペルー」という、このような冊子を市が財政的にバックアップし、幼稚園の先生や住民の皆さんが編集委員会等のワーキンググループを組んで手作りで作っているわけですよ。それはグループが今まで取り組んで来たという事などをストーリーにして子どもたちに関心を引かせるように作成したもので、幼稚園児などの小学校入学前の児童を対象にして作ってるんです。それは宇宙からペルーという宇宙人の男の子が地球にやって来るとい話なんですね。ペルーの第三惑星は環境が汚れてしまって、遠くから見たら物凄く綺麗な青い地球が映っていた。だから宇宙船に乗ってやって来た。そこで出会った地球の子供達は、自分達の幼稚園にペルーを連れて行ったり、遊ぶところを見せたりするんです。そういう話の中で、自分達は物凄く紙を使っているとか、ポイ捨てしているとかに気づくというストーリーです。そこには、家具がリサイクルされたり、ペットボトルが子供達の黄色い帽子や洋服になっていたりするとか、新聞紙もリサイクルされて新聞紙や雑誌になったりする、そういった身近な例を取り入れて小さな子どもにもごみ問題に興味を持ってもらおうというお話になっているのです。

そこで非常に驚いたのは、小学校低学年向けの本を業者に丸投げといった事でなく、地元の人達が作っているんですね。この本の内容については、ネーミング一つとっても、ゴミニティーなどのようにユニークなものを考えています。例えばここの中でてくるはっちゃん、発見が大好きなので、発見の発にかけてはっちゃんとか、冒険とチャレンジが大好きなけんちゃんとか、自然界から生まれた不思議な生き物の地球ジャックとかですね。その3人がこの本では主役になり自分達でごみ問題を考えるものです。

また、1日当たりどの位の水量という場合に、数字を上げて子供達は分からないわけです。ですから子供達にどういうふうに言うかという、北九州では牛乳パックで1人当たり250本分も水を使っているんだよというふうな説明をしています。牛乳パックだとぱっときますよね。

リサイクルについても、子供の時から押し付けることなく、回収するのを見せて分かってもらうという努力がなされていますね。例えばペットボトルはフタを取って軽くすすいで、北九州の場合はさらに潰して出すという事なんです。それから5月30日はごみゼロの日とか、子供エコクラブの中でもキーワードを用いて子供達を引き付け、クラブ作りなどを行っているわけです。

よね。皆様方は、自分の子どもに小学校の上級生などがいるとこういったテキストを読むことは恥ずかしいでしょうけれど、じっくり読むとかなり基本的な情報が出てきて学ぶところが大きいです。

私は何も北九州と同じような物を作れと言っているわけではないんです。ただこれを見て思ったのですが、その地域の、例えば塩谷広域のこういったテキスト作りに向けて、塩谷広域の人とか塩谷町の人に関わって、地域のユニークな物を話し合いながら作っていくという事は、子供達に物凄いインパクトを与えらると思うのです。そしてその子供達が大きくなったとき、その事がウエートのような物になって、先程のマナーの悪さとかポイ捨てとかなどの解決策の決め手になるんじゃないのかなという気がするんですね。ですからそういう点からいうと、子供達をキーワードにして学校の先生達だけが環境問題を知らせるんじゃなくて、地域の人達も子供達に教え、そして伝えていくというやり方を是非とも工夫するべきだと思います。また、金太郎飴のように自治体が全部同じというのではなく、個性があって然るべきだと思います。

そういうような事を皆さん是非、先程陣内先生のお話にありましたように、私は今日がスタート地点だと思っております。今日で終わりではなく、これから始まるんだと思っていますので皆様と是非、一緒にやっていたらなと希望を強く持っています。

陣内助教授（コーディネイター）

ありがとうございました。環境教育・環境学習などの提案がありましたが、石川県ではもう10年も前に町づくりという観点から小学校・中学校用の本を作っているんです。これは県が始めたもので、県内の各自治体がそれを参考に作っているのですが、徐々に広がりつつあります。時間がかかる事ではあるでしょうけれども、まずは1歩を踏み出すという事が重要かなと思います。それから教材を作る事について中村先生からご指導があったんですが、誰がそれを作るのかということです。正直いって学校の先生は環境問題について教えるのは下手です。むしろ、増淵さん、立岡さんや皆さんのように、日常生活の中で環境問題に対して意識を持っていらっしゃる方々達が、日常生活の中で「こういう知恵を絞っているんだよ」という観点から子供達の前でお話されるのが説得力がずっとあるんですね。先生が駄目ということではないですよ。先生と皆さんが協力して一緒にやるという事です。

面白い事例があるんですけど、ご存知の方も多いと思いますが、北陸の福井県では『ゴミレンジャー』というのをやっているんです。子供達の好きなゴミレンジャーとかありますよね。ゴミレンジャーを誰がやっているのかというと行政の職員の方達が着ぐるみを着て、幼稚園とか小学校に行ったりしているんです。ごみをどうしていくかを色々子供達に伝えていく。まさに環境教育といった事ですね。是非とも塩谷広域行政組合の職員の方々に、ゴミレンジャーをやっていただければと思います。

酒井教授

先程色々しゃべらせていただいたので、1つだけ述べさせていただきます。我々が出したごみ、これが最終的にどこでどうなるのだろうかという事を学

習する必要があると思います。そういう意味で色々見学しましょうよという  
ような事はあるんですけど、じゃあ見学に行く時に今の我々のごみが出され  
ている所だけでなく、もう1つ今最高の物のあるところをセットにしても  
らいたいです。何が言いたいかというと、例えば、いいかげん使い込で来た  
ごみ焼却炉に行きますと「うわーこんな大変な所なんだ」となります。大体  
そうなんです。大変だということを知っていただく事はいい事なんです、  
「あんな物うちには欲しくない」と言うのは当たりまえです。

例えば、私達塩谷地区、私達、私達と気軽に言いますが、私も塩谷地区  
の住民なんで私達と言いますが、処理した物は最終的に福島の方に溜まっ  
ているわけです。その最終処分場そこに行きますと、もう嫌になりますね。  
近寄りたくないです。それじゃ駄目だという事で「ここは本当に最終処分場  
なの？」といところいたくなるような所を見てもらうんです。その両方を見  
ていただきたい。いずれにせよ我々のごみは何とかなければいけないわけ  
ですから、最終処分場までやりたいというふうにならないとまずいだらうと  
思いますので、そのあたりを知っていただきたいですね。

陣内助教授(コーディネイター)

非常に貴重な意見ありがとうございます。

酒井先生の話の中でも木更津と武蔵野市が出ていたんですけど、私も先生  
と一緒に来てたんですけど、特にショッキングだったのは武蔵野市です  
ね。市役所の直ぐ隣にごみ焼却場があるんです。周りには普通の住宅街です。  
なぜそれが出来るのか、酒井先生の基調講演にもありましたが周りの人達が  
不快感が出ないような努力を物凄くしていますし、情報公開を徹底的にやっ  
ているんです。出てくる情報のあらゆる物を公開しますから問題はないので  
しょう。それでやはり先進的な所を是非見ていただきたいなと思います。

では話が一回りしましたので、1つだけ皆さんどなたでも良いんですけど、  
私の質問にお答えいただきたいんです。増淵さんのお話の中で「消費者が変  
われば製品を作る事業者サイドも変わるんじゃないか」という話がありまし  
た。これはずっとそう言われていますが、なかなか変わらない。結局私達が  
求めている物が環境に配慮されていなくても、価値が「安ければ買う、便利  
だから買う」ということで、それが「環境にいいから買う」という観点でない  
からそうなんですかね。だとしたらどうすれば私達の消費構造が変わるんで  
しょうね、ということはずっと個人的に思っていて・・・それはたぶん  
変わらないんじゃないかな、色々ありましたから。

ご意見とか感想がありましたらいただきたいんですけど、消費者の立場か  
ら増淵さんどうですか。

増淵氏

例えばですね、私が子育てしている時に、添加物が体に良くないとか着色  
料を使うとどうなるのか、とても身近な問題だったんです。子供に直接影響  
するという事が。今、子供達が成長して、私どもの年代になってしまいます  
と、添加物が入っていようと美味しければいいかなとか、テレビで宣伝して  
いたので買ってみようかな、というような方向にとらわれてがちのような気  
がするんですね。でもお店に行って、いろいろと見てよく考えるという事が

必要だなと思うんです。

でもそこまでの意識というのが持てないんじゃないかなと思います。誰もが分かっていると思うんですよ、環境に良い物を皆で考えていきましょうという事を。でも実際にお店に行くと、どうしてもいつもの物を食べる方向になって、そこまで考えるという余裕がないんじゃないのかなと思うんです。

酒井教授

私も絶対には買わないですね。自分自身が出来るかというとはほとんど出来な  
いですね。そういう意味では、ごみ、その物なんですけど。でもそういう意  
味でいうと今の商品みたいな物は何とかして、良いという物を安くするとい  
う、税金を使ってでも安くする、また、同時に安いだけでは駄目なんです。  
安いだけでは手が出ません。見栄えが良くなければ。何とかしてこの2つを  
やらないと、これは別にごみだけの話だけではなくて、家は農家だったし、  
弟が農家やっているんで感じるんですよ。見栄えが良くないと買ってくれな  
い。同じ少し曲がったキュウリは真っ直ぐでないを買ってくれない。真っ直  
ぐつくるには手間がかかるのでコストがかかる、にもかかわらず曲がったキ  
ュウリは買ってくれない、値段が安くても買ってくれない。見栄えとコスト  
を何とか下げないと。

環境の事を言っているんで、それにかかるコストのこともあるので、何と  
かコストを下げなければ、たぶん私は正直言って無理です。

陣内助教授(コーディネイター)

直接自分に関係していかなければ、なかなか行動に結び付かないもので  
すね。関係してくれば、今日の大きなテーマであるごみ問題みたいに直結し  
ていくのかなと思うんですけど。

ここで会場の皆さんの中からパネラーの皆さんにご質問とか自分は「こ  
う事でごみの減量しているんだ」とか、「こういうアイデアやったらうまく  
いった」とかですね、皆で色々と共有していきたいと思いますので、ご質問  
ご意見などございましたら、何でもけっこうですので。

会場(齋藤(塩谷町))

塩谷町在住の齋藤と申します。酒井先生の話の中で、ごみの減量は大変め  
んどうという事でお話があったんですけど、確かに私もごみ減量はなかなか  
めんどうで実行出来ないんです。今の話で子供達の教育といいますか、子供  
達に伝えていくという、教育で本とかですが、子供達の意識改革もさる  
ことながら、大人の方の意識改革というのも必要になってくるんじゃないの  
かなと思います。また、具体的にめんどうくさくなく、ごみの分別減量が出  
来ればいいのかと思うんです。具体的な意見があればすぐに減量出来るの  
ではないかと思いますが、また、先生方とかパネラーの方々のご自分で何か  
工夫している事がもしありましたらお伺いしたいです。

酒井教授

やはり言いつぱなしというのはまずいで・・・。今もう子供達がいませ  
んの、我が家でやる時には自分自身にストレスがかからないので難しいん  
です。

大学にいる時には、うちの研究室の連中がこんなごみの出した方をしたというふうに言われますと私、立場がないので……。ですから学生達を何とかしようと。何かしようとすれば自分が率先してやらないとうまくいかないものですから、ペットボトルはこうやって出すんだと一緒にやるんです。一緒にやっていたら、研究室で一番ごみの分別の出し方も心得ている人間になってしまいました。

学生達はそれをやるのが当たり前になりました。しかし残念なのは研究室にいる時だけの限定です。「下宿に帰ったらやっていません」という事です。ですからこれをもう少し広げていくという事が、1つ必要なと思っています。家に帰った時に「日曜日の粗大ごみ」と言われたくない気持ちと同じように、近所と一緒に「おたくの班はなんなの」と言われたくないという気持ちがありますので、それを使うのも1つの手だなというふうに思っています。

中村教授

私は大人の意識改革をこうしたら出来るというのではなく、気が付いたら意識が変わっていたというのが良いですね。ではどういう事なのかというと、分別は苦勞しますし、めんどくさいわけですね。ですがそういった一定の人のエネルギーが、ある意味では報じられているわけですね。そうした事が効果として、身近な事例として、分かるような物を我々工夫して作っていく必要があるわけですね。

それは北九州でやっている『エコッパ』という北九州ブランドのトイレトペーパーが確立されつつありますが、それは、そこで出た紙パックなどでトイレトペーパーを作るわけですね。そのために、紙パックなどを一生懸命洗って乾燥して出すわけですね。その人達にとってみれば『エコッパ』という北九州ブランドのトイレトペーパーという形で帰ってくるわけですから負担の問題があるとしても、指定袋を15円で買いますよね。指定袋にお金を払うとそのお金によって基金を作って、効果が住民の人達に分かるようにしているわけですね。そうやって工夫している所は色々あるんです。小田原もそうなんです。

私は北九州あたりの大都市よりも、そういった事は塩谷町の方がやりやすいと思うんですね。生ごみの堆肥化にしてもそういった環境条件は都市部より物凄くめぐまれているのだから皆さんで話し合っ、大人から子供まで巻き込んで楽しくやっていけたらと思っています。

立岡氏

先程最後に言いましたけどアルミ缶がもったいないので、あれを何とか利用したいなと思い、いろいろと関係機関に聞いたのですが、やる事は多少お金がかかってもいいんです。飲み残しのアルミ缶に入っているジュースとか、それに集まる蠅や蛾ですね、そういった衛生問題が発生するのが心配で、足踏みというか研究段階なんです。何かいい方法はないのかなと思っています。

陣内助教授(コーディネイター)

皆さんからいいアイデアがあれば、逆に立岡さんにお知えていただければと思いますけど。

増淵さんは斎藤さんのご質問につきまして何かありましたら。

増淵氏

私も分別は大変だなあと思っていう方なので出したら物は全部もっていただけたら1番ありがたいと思っています。

陣内助教授(コーディネイター)

他にご質問ありませんか

先程の斎藤さんのご質問に関係することなのですが、この小さいごみ袋、何だか分かりますか。武蔵野市役所が出している物ですが、ここに色々書いてあります。『これしか出せないごみ分別』これは武蔵野市の焼却場でごみ燃やしますよね。でも、今日、酒井先生の話にありましたように、必ず焼却灰が出てきます。それを最終処分場に埋め立てるわけです。武蔵野市は東京都内の別の場所に最終処分場があって、そこで埋立てているんですが、これは、最終処分場から割当てられている「武蔵野市民1人が1日に出せるごみの量がこの袋だけです」と配ってるんです。「これしか出せませんよ」と、こういう事も1つのやり方かもしれません。こういう物を突き付けられれば、「あらそうなの」と感じちゃいますよね。これも1つの事例かなと思います。

では残り時間もありませんのでここでまとめの方に入りたいんですけど。

今日は最初に酒井先生から「ごみはなくなる」というお話でしたね。でもきちんと分別再資源化していくということですね。「やらなければ当然いけないよ」というお話がありました。とにかく1歩を踏み出そうよという事で投げ掛けがあったんですが、それを受けて住民代表という事で立岡さんと増淵さん、それから共同研究に関わっています中村先生、酒井先生に、パネラーとしてごみ減量化についてのお話をいただきました。最後にそれぞれ4人の方々からごみの事を考えるキーワードをですね、キーワードが浮かなければ「私はこんな事は絶対にやらないといけないんじゃないの」、もしくは「こういった事は自分は絶対やろうと思う」等、決意表明みたいなものがありましたらお伺いしたいのですが。

立岡氏

今日のお話をいろいろと聞きまして分別という事、そして分別したものを再資源に回す、それだけは私なりにやりたいと思います。

増淵氏

私は1人1人が、本当にちょっとした身近な事が出来ればいいなと思っていてるんですね。私は、生ごみを可燃ごみとして出しているわけですので、生ごみの水切りをもう少し良くするとか、身近かな心配りが必要なのかなという事を感じました。

中村教授

私は、世代間の橋渡しですね。橋渡しが1番のキーワードだと思っています。それを特に強調したいのは、私がこういう問題を塩谷町の子供達に教えられるかということ、私には出来ないんですね。つまり世代間の橋渡しなんですけど、その地域に住んでいる、例えば塩谷町だったら塩谷町の大人達が、ここに住む子供達に教えていかなければならないということなのです。その大人達の知恵を集めて作った物を子供達に伝えていくということ、その事が

また、今日お話にありましたようにポジティブな人間関係とか、新しい社会を作っていくことなんですね。今日私の話に出た「お金の回し」というか、観光とか町の活性化に結びつく物だと思うんですね。ごみ問題とはそういう可能性を秘めた領域だと私は確信を持って言えると思うんです。

酒井教授

全体的な話をさせてもらいましたので、個人的な決意表明というような形で話させていただきます。私はそれなりのポストでそれなりの事をやっているもんですから、ある意味、人前でいろいろな事をやるのが格好つかないんです。それではすまないの、人前でちょっとおせっかいをやるとういうふうに分自身に言い聞かせています。

ごみ問題に関しましては、ともかくどこかにごみが捨ててあったら、出来る限り人前で拾って所定の場所まで持って行く、これをやるかと決意してません。

陣内助教授(コーディネイター)

では最後は北島先生に。

北島教授

私は北島家ではごみ奉行なんです。私は宇都宮大学の北島なんですけど、このシンポジウムの座長を務めています。決意という事で、先程酒井先生が話の中で「基調講演で共感しあえる北島」と名前が出てビックリしたんですが、ここにおられる皆さんにお願いがございまして。ここの来られている皆様方の中にですね、松島・小入・早乙女地区の方々が、多分・・・今日は来て居られないのかなと思いますが。皆様方ですね、朝起きて「今日も頑張るぞ」、そして家族団欒して、夜も晩御飯を食べて明日の為に元気になる、こういうのを普通の生活上では、『正常な生活』というふうに考えていただければいいんですが。実は皆様の正常な生活はですね、ごみの問題にしますとこの3地区の方々のおかげなんですね。あの方々がごみをストップさせた時、生ごみ等の類は山積みになったはずなんです。私はここに来て窓から景色を見た時「いい町ですね、なんといい山里で」と思いましたが、逆に言いますと「なんとごみを捨てるにはいい町だ」と感じたところでございまして。そこら辺いたる所に簡単に投げ捨てられるなと思ったんです。

まあ、そうは出来ませんから。やはりですね、皆様の日常の生活が正常に出来るのは、松島・小入・早乙女地区の皆さん達のおかげですよ。もう一つは、小野町に最終処分場がございまして、現在裁判係争中ですが、こちらには皆様方の焼却灰をお願いしているわけですから小野町の住民の皆様のおかげでもあります。最終処分場を作りますと、その山や谷を掘ります。そうするとやはり皆様方のところに最終処分場を僕は作ってもいいと思います。しかし、小野町の皆様方が「よし」という事で許可を出したわけですよ。もちろん一部では大きな反対運動がありました。従いまして大事なものは、共感し合えるというのは難しいということです。夫婦問題も難しいんですから、ましてやごみ問題になりますとかなり遠くなりますよね。だけどその事を是非に、ごみ問題をきっかけに、ごみを媒介にしてですね、松島・小入・早乙女地区の皆様方をお考えいただいてごみの減量に努めて頂きたい。

ここは3地区の集落がありますから逆にやりやすいんだと思うんです。大宮・船生・玉生ですか。ここも人口減ですね、人口減少であるといえればコミュニティを作っている根本である人がいなくなるわけですから壊れ易いんです。

今日は日曜日ですから、明日、処理場には120tのごみが集まります。そうすると煙が出ます。南無阿弥陀仏と唱えると極楽浄土という言葉がありますが、ごみを減らす事は、松島・小入・早乙女地区の皆様方の少しでもお助けが出来るという事を念じながらですね、ごみの減量化に勤めていただければというのが、私の座長としてのお願いでございます。

陣内助教授(コーディネイター)

最後にコーディネイターとして一言だけ言わせてください。

先程北島先生からありました、松島・小入・早乙女地区の方々に私達が共感できるかということは重要な事だと思ひまして、最後にパネラーの皆様方から幾つかキーワードをいただきました。そのためにですね、心配りをする、出来ればお節介おじさん・おばさんになろうかという事もあつたりしますよね。それからですね世代間の橋渡しに関しても皆さんに是非とも頑張っていたきたいということでした。今日は一連のシンポジウム最後なんですけど、中村先生からご指摘がありましたように、塩谷広域でのごみ問題を考えるスタートポイントであり、今日がスタートの日だと私達は考えています。

今後の事なんですけど、出来ればごみ問題に限らず、塩谷広域の地域で循環型社会という物をどうしていくのか。その中には当然ごみ問題も含まれていますが、そういう事をバラバラでなくて、皆さんのようにいろいろな事に関心を持っておられる意識の高い方々や、出来ればここに来ていない関心のない方々、行政、それから事業者の方々や我々みたいに研究をやっている人間、一堂に会して議論をしていく事をこれから続けたいと考えております。ぜひ、皆様方にもそういう所に参加していただきたいし、周りの方々にですね、今日来ていない方々にも「そういう事があるから参加してくれよ」とお誘いいただき、今日議論された事を伝えていただければなと考えております。

また引き続きごみ問題・環境の事に関して皆様に関心を持ち続けていただけたらなと思ひます。ありがとうございました。